

(平成30年10月25日)

第30回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： H30. 10. 16 (火) 18:30～21:00

場所： 東京・文京シビックセンター 4F B会議室

出席者： 21名 (会費支払者22名)

新規会員 (出席者)： 小西博也氏、福富健 (つよし) 氏、中野忠洋氏、田上麦文氏

< 配布資料 >

資料—1 上田女子短期大学 総合文化研究所 平成30年大会 参加報告
(荻原貴氏作成) 1枚 (表裏) 【資料添付】

資料—2 英軍事書の翻訳第一号『英国歩兵練法』とその周辺 (6枚) 及び 関連
連絵図 (1枚) (河元由美子氏作成) 【資料添付】

資料—3 「幕末の武器・大砲 (11枚)」 及び 「参考資料 (14枚)」
(沓掛忠氏作成)

資料—4 2018. 10. 28 「もうひとつ研」第13回研究集会のご案内
江戸末期立憲の士 赤松小三郎ともう一つの「明治維新」(関良基教授
講演会) (石井光春氏作成)

< 内容 >

1. 大田区が来年「勝海舟記念館」の創設を企画しているが、そこに勝海舟との関連
において赤松小三郎の事蹟の展示をしていただけることを交渉している。
(石川浩氏)
2. 上田女子短期大学 総合文化研究所 平成30年大会 参加報告。(荻原貴氏)
詳細は添付資料参照 (上田の先覚者赤松小三郎1, 2)
3. 赤松小三郎が翻訳した「英国歩兵練法」は2つある。1つは下曾根稽古蔵版で赤
松は (第一、第三、第五編担当)、加賀藩士・浅津富之助は (第二、第四編担当)
で「青本」と呼ばれている。もう一つは「赤本」と呼ばれる赤松単独翻訳本で薩
摩蔵版として出版された「重訂英国歩兵練法」である。両者の翻訳に関わる相違
点を詳細に考察した報告。(河元由美子氏)
詳細は添付資料参照 (英国歩兵練法とその周辺)
4. 幕末の武器・大砲の説明 報告 (沓掛忠氏)
 - ・ 天文2年(1543年)種子島に2丁の火縄銃が来たが、複製の製作には「ネジ」
がポイントであった。

- 日本で初めて本格的な戦争で鉄砲が使用されたのは長篠の戦い（天正3年、1576年）である
- 火薬づくり。各藩は製造方法を極秘事項としていた。製造場所 加賀藩・・石川県五箇山、幕府・・岐阜県白川郷（天領）、盛岡藩・・東中野村中心、上田藩・・沓掛村（現在の青木村）なお、赤松小三郎から沓掛村の火薬製造担当者に宛て「早く火薬を送ってほしい」という手紙が残っている。
- 豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）は朝鮮に大きな犠牲を与えたが、日本には技術変化をもたらした。（火薬、活字（銅）、磁器、綿花栽培など）
- 大砲の登場。（慶長19年（1614年）、慶長20年（1615年）大阪冬の陣、夏の陣。家康が摂津の鍛冶師（柴理右衛門）に大砲を造らせた。
- ペリー来航に伴う、幕府の大砲製造
- 湯島馬場大砲鋳立場・・御茶ノ水駅前、江川英龍の指導
- 関口製造所・・関口水道町（文久2年（1862年））小栗忠順が鉄砲製造の最高責任者。製造責任者は武田斐三郎。砲身に錐で穴を開けるため、水車を動力とした錐鑽機（すいさんき）が使用された。
- 滝野川反射炉・・元治元年（1864年）鉄製の大砲製作に方針転換
- 佐賀藩の対応
- 幕府に鉄製大砲50門を納入。
- 薩摩藩の対応
- 薩英戦争 文久3年（1863年）により滑空砲が時代遅れであることを覚った。
- 薩英戦争の外交交渉の席上で「英国から近代的兵器の艦船と大砲を購入したい」という提案がなされる。
- （薩英戦争以前の近代化）
- 嘉永4年（1851年）鹿児島城内に精錬所を建設。齊彬は精錬所を「開物館」、礮の工場群を「集成館」と名付けた。
- 集成館では砲身をくり抜く鑽開台を建設、ライフル銃、地雷を製造した。
- 軍需品以外では、薩摩切子、磁器陶器、工具、農具など多彩な分野の産業生産を行った。
- 詳細は講演録「幕末の武器・大砲」と「参考資料」を参照。

以上

小山平六（62期）

次ページ以降

添付資料1 上田女子短期大学 総合文化研究所 平成30年大会 参加報告（荻原）

添付資料2 河元由美子氏発表要旨

（平成30年10月16日）

上田女子短期大学 総合文化研究所 平成30年大会
「上田の先覚者 赤松小三郎」（TV放映）のご報告

報告者：荻原貴

大会日：平成30年6月30日（土）

放映日：平成30年7月14日（土）上田ケーブルビジョン

<内容>

1部 講演：「信州11藩の洋学と赤松小三郎」（40分）

2部 紙芝居「上田生まれの赤松小三郎さん」（15分）

1部 講演：「信州11藩の洋学と赤松小三郎」

講師：総合文化学科 大橋敦夫 教授

1. はじめに

・幕末の上田藩士 赤松小三郎は議会政治提唱者として近年注目されるようになっているが、彼の先見性を支えたものは彼の学問、特にオランダ語（蘭語）・英語・数学であった。私は日本語の歴史について研究する立場から、今回は赤松が学んだ蘭語・英語・数学などの洋学と彼が残したものに迫る。

2. 日本語史上において蘭語が果たした役割についての考察

・具体的に、洋学資料によって明らかになる日本語の資料の実例について紹介があり、日本語史、特に近代日本語史の研究には洋学資料が不可欠であることの説明があった。（詳細は省略）

3. 信州11藩の洋学事情

・近世の信州でどんな洋学が展開されていたのかについて、各藩（11藩）の藩校蔵書の分析を基に行った。

（1）洋学の導入が進んでいた藩～松代、上田、飯山、小諸、松本、高遠

特に、松代と上田が進んでいた。

・松代：藩主真田幸貫の下で佐久間象山が蘭学の種をまいた

蔵書の多くは図書館ではなく真田宝物館に残っているのが特徴

蘭語・英語・仏語などの洋書が多数

・上田：藩医に蘭方医が多く、藩士全体に蘭学が浸透していた

11藩中最大級の蔵書であったが蔵書の多くは残念ながら明治になって売られてしまい、わずかに藩主の手元に残ったものが市立図書館に保管

社会科学、軍事、自然科学、医学、が多いのが特徴

- (2) 軍政改革が進んでいた藩～須坂、岩村田、竜岡（田野口）、高島、飯田
(1) の藩に比べるとどちらかというと小規模な藩で、藩校での洋学導入よりは軍の西洋化への改革を進めた。

4. 洋学にかかわった人物の内、語学の面で注目すべき事績を残した人物

- (1) 佐久間象山：松代藩、洋学普及の目的で蘭和辞書の増補・改訂を幕府に願い出るも却下（→6年後に幕府が実現）
(2) 村上英俊（えいしゅん）：松代藩、妹が松代藩主の側室、仏和辞書作成、後に幕臣へ
(3) 赤松小三郎：上田藩、別途解説
(4) 田中芳男（よしお）：飯田藩、藩医の生まれ、動植物の和訳に貢献
(5) 田中義廉（よしかど）：飯田藩、芳男の弟、文部省最初の「小学読本」を編集
(6) 伊沢修二：高遠藩、明治教育行政のパイオニア

5. 赤松小三郎について～残した洋学資料

- ①蘭語翻訳刊行 ・新銃射放論（1857）
・矢ころのかね 小銃穀率（1858）
②英語翻訳刊行 ・英国歩兵練法（1866）
・重訂 英国歩兵練法（1867）
③蘭語修行の成果 ・熟語蘭語～赤松直筆、多くの蘭語の熟語の日本語訳を記した、口語的表現あり、上田市立図書館花月文庫蔵

6. 今後の課題

幕末は人間関係の重なり（ネットワーク）が特に意味を持った時代とも言えるので、当時の洋学者のネットワークを更に調べる必要がある。

<ネットワークの例>

「勝海舟」
佐久間象山～赤松小三郎・芦田柔太郎～堀直虎
└─活文禅師─村上英俊

2部 紙芝居「上田生まれの赤松小三郎さん」

作：伊東邦夫
絵：堀内稔
制作：赤松小三郎顕彰会

- ・ナレーション～総合文化学科の学生4名
- ・堀内稔氏のメッセージ～学生が代読

以上

英軍事書の翻訳第一号『英国歩兵練法』とその周辺

河元 由美子

はじめに

慶応2(1866)年3月、江戸日本橋の書肆山城屋佐兵衛方より『英国歩兵練法(五編八冊)』が出版された。原本は *Field Exercise and Evolutions of Infantry, as Revised By Her Majesty's Command, 1861 by Great Britain War Office, 1862, London. 537p* であり、翻訳者は上田藩士・赤松小三郎(第一、第三、第五編担当)と、加賀藩士・浅津富之助(第二、第四編担当)の二人である。

『英国歩兵練法』(以下『歩兵練法』)は慶応2年、下曾根稽古場蔵版として出版され、表紙の色から俗に「青本」と呼ばれている。砲術家・高島秋帆直弟子の下曾根金三郎は葦山代官江川英龍とともに高島流砲術を受け継ぎ、江戸に砲術の塾を開いていた。赤松も浅津も下曾根塾で砲術を学んでいた。

長崎に舶載される洋書の殆どは蘭書であり、蘭書からの翻訳が大半を占める中、次第に他の言語からの翻訳も行われるようになった。安政期から慶応年間には特に兵学関係の翻訳が盛んになるが、『英国歩兵練法』は蘭語を媒体とせず、直接英語から翻訳された第一号として英学史上に位置づけられる。蘭学から英学への移行期に現れた書物を代表する作品としての評価もある。しかもそれが蕃書調所の学者や長崎通詞等の語学の専門家によるものでなく、微禄の武士階級のものによってなされたことも意義がある。誰でも蘭学を学びたいと志す者には蘭学塾が開けていたが、英学は新しい学問でまだ組織的な学習法も英学を教える塾も少ない時代、英語を学びたいものは数少ない英和辞書や英文法書、あるいは蘭英辞書、英蘭辞書、蘭英文法書に頼る独学の道しかなかった。赤松の英語への関心は長崎留学(長崎海軍伝習所)時代に目覚めたものと思える。柴崎新一『赤松小三郎先生』によると「・・・先生さきに蘭学に精通し、泰西の新知識を習得せられ、…当時英国が強国として世界を風靡し…、将来英語に抛らずんばことを成し難いと看破され…(p.68)」とある。国際都市長崎には各国の船舶が寄港しており、外国人の姿も多く見られ、英学塾も開かれていた。

『英国歩兵練法』出版は一気に赤松の名を高め、慶応2年には京都に居を移し二条衣棚に英学塾を開く。赤松の名をしたって多くの塾生が集まった。特に兵制を英式にした薩摩藩の関心は高く、五条今出川の薩摩藩屋敷に彼を招き、藩士に英式兵学と教練を教授させた。藩主は原本の1864年改訂版の翻訳を命じ、慶応3年5月には『重訂英国歩兵練法』(以下『重訂』)(七編九冊)が薩摩蔵版として大阪の書肆秋田屋太右衛門方から出版された。此の赤松単独翻訳本は表紙の色から俗に「赤本」と呼ばれ、見返しに「薩摩軍局」の朱印が押されている。『重訂』出版の4か月後、慶応3年9月、赤松は上田藩から帰藩を命じられ、その帰途薩摩藩士により五条東洞院で暗殺される。享年37歳。薩摩藩は『重訂』が幕府に利用されるのを恐れ、薩摩藩の内情に詳しい赤松を抹殺せんとした犯行であった。

本発表では幕末の兵制洋式化の実態（兵書翻訳と軍事教練）、共訳者浅津富之助略歴、『歩兵練法』と『重訂』について考察したことを述べる。

1 洋式兵制の導入

1-1 兵書翻訳

文久2（1862）年幕府は兵制改革を行い陸軍を創設した。歩、騎、砲の三兵制度を導入し、幕末に輸入した書物の翻訳によって海外の軍事情報を得ようとした。元治元年ごろには蘭書より『砲軍操法』『歩兵心得』『歩兵操法』『歩兵制律』『築城典型』『馬療新書』などが翻訳された。ちなみにその内容を『歩兵心得』（大築保太良訳）から例を引くと、第一編生兵練法（歩兵隊の区分と編成、新兵に行う基本的な動作）、第二編 早号（火薬の扱い）第三編 遠近測量、第四編 銃の扱いの四編からなる。歩兵というより小銃のことを述べたものである。また『歩兵練法』（大鳥圭介訳）は第一秩 生兵練法（新兵の姿勢、向き方、歩法、斜行進等基本的な運動法）、第二秩 小隊練法（隊形の変換、隊の集散等集団運動に必要な訓練）、第三秩 大隊練法、第四秩 聯隊練法の四秩からなる。

これに対して英式教練を伝えたのが『英国歩兵練法』で、其の内容は生兵、小隊訓練から始まり、中隊、大隊、聯隊と、蘭式の『歩兵練法』と非常に似通っている。

蘭式、英式の違いは歩長（一步の長さ）、歩数（一分間の歩数）にある。英式では歩長 30 インチ（75.6 cm）、遅速の歩速は 75 歩、早足は 110 歩、駆足の歩長は 36 インチ（91.4 cm）、歩速 150 歩である。蘭式は常歩の歩長 75 拇（拇は親指に幅？）、歩速 105～108 拇、駆足の歩長 80 拇、歩速 165 歩であるが、実測においては両者ともほぼ同じ数値である。英式の号令にはラッパを用いることがあり、蘭式では太鼓を用いる。長崎の海軍伝習には学科の中に鼓笛の練習があり、『歩兵練法』には 15 種のラッパの楽譜が採録されている。

『歩兵練法』はその後改定を重ねた原書から後続の兵書翻訳の先鞭をつけた。また関連書出版も多く、号令詞だけを独立させたもの（銃隊方蔵『英式操練歩兵令詞』慶応3年、浅津涉『英国練法号令詞』明治2年）や、図によって動作、運動を示すもの（古谷佐久左衛門『英国歩兵練法図解』慶応4年）などがある。『歩兵練法』も原書からの翻訳が 1866 年から 1883 年までに 11 種ある（松島秀太郎「翻訳英国歩兵操典の刊行と推移」『石川郷土史学会会誌』25号、石川郷土史学会、1992）。

慶応2年、幕府は新たに仏式兵制導入を決め、フランスから軍事顧問団を招聘する。その準備として横浜に語学所（フランス語伝習）を開き、卒業生を通訳にあて、顧問団の来日に備えた。慶応3年には号令と隊形を図示した簡単な教練書『仏蘭西例言図解』が田辺良輔により翻訳され、軽歩兵操練のため『仏蘭西軽歩兵程式』が大鳥圭介によって翻訳が完成、教練書として使われた。兵書翻訳情報は国立国会図書館HP「幕末西洋兵学受容」、横浜開港資料館HP「軍事関係翻訳書」で得られるので、詳細はそれらを参照されたい。

1-2 軍事教練

長崎海軍伝習が外国人による第一次軍事教練とすると、第二次は横浜英仏駐屯軍の指導で行われた。洋式軍隊を指導する下士官養成のため、幕府は海外に留学生を送り、彼らの帰国を待って軍事教練を行う予定だったが、それよりも現在横浜に駐屯している英仏軍を利用することを思いついた。開国とともに横浜には外国人居留地が設置された。時あたかも攘夷運動が盛んな時期で外国人殺傷事件が頻発していた。居留地の自国民保護を名目に英仏両国は横浜に軍隊を送り込み、1863年から1875年までの12年間、交替や兵の増減を繰り返しながら横浜山手に拠点を置き駐屯した。彼らの

存在は軍事教練を必要としていた幕府にとってまことに都合がよかった。

文久3年、神奈川奉行所支配下に設置された幕府軍は居留地警備を目的としており、頭取には窪田泉太郎が任命された。幕府軍は1864年に到着した英国第20連隊第2大隊の指導を受けることになった。その具体的な教練指導を示す資料は明らかではないが、当時横浜で刊行された英字紙や、ブラック『ヤング・ジャパン』、サトウ『一外交官の見た明治維新』などに日英軍の良好な関係や合同軍事演習の様子が報じられている。1866年3月の合同演習では第20連隊と窪田率いる幕府軍が模擬戦を行い、日本軍はみごとな教練の成果を見せた、とある（『ヤング・ジャパン』234ページ）。

赤松小三郎は元治元（1864）年、第一次征長で江戸に出動、戦備用品の調達などをしながら江戸、横浜を往復していた。幕府は兵を撤退させたため、思わぬ時間の空白ができた。赤松は下曾根塾に再入門、この時下曾根塾にあった英国に軍事書を塾頭平松良蔵が赤松に翻訳を勧めたと考えられる。横浜に出向いたときに赤松は横浜の英駐屯軍の演習をかいま見たり、横浜の商人や英国領事館員などと広く接触し、交友を深め見聞を広めた。英騎兵隊のアプリン大尉にはアレクサンダー・シーボルトの紹介で英国公使の許可を得た後、兵学関係や騎馬の扱いに関する知識、英語の指導などを伝授してもらった。アプリンより馬術書（騎兵操典）を借り、それを数日で読破、アプリンは赤松の英語読解力の速さや理解力との正確さに驚嘆している、この時期の赤松の英語力の高さを示す一例であろう。

2 共訳者・浅津富之助略歴（明治期に南郷茂光と改名 1838—1910）

天保9（1838）年、加賀藩士南郷九右衛門の次男として加賀に生まれる。安政3（1856）年、18歳で江戸に遊学、村田蔵六の鳩居堂、高島秋帆、下曾根金三郎のもとで砲術、兵学、蘭学を学ぶ。蘭学を学ぶ傍ら細川潤次郎から英語も学ぶ。土佐藩士細川潤次郎は江戸の江川英龍塾内で中浜万次郎より英語を学んでいる。

加賀藩は安政元（1854）年、早くも洋式武学校「壮猶館」を創設、佐野鼎（下曾根塾出身）を砲術師範として招く。佐野は万延元（1860）年の遣米使節団や翌文久元年の遣欧使節団に参加、外国事情に明るく、英語も学んでいる。文久2年、加賀藩は七尾に軍艦所を設け、英国に軍艦「発機丸」を発注、翌3年、佐野らをその引き取りに横浜に派遣した。同艦の国元への回航に浅津も加わっている。加賀藩は諸藩に先駆け海軍創設に力を入れ、発機丸は加賀藩海軍艦艇第一号となり、「梅鉢海軍（加賀藩の家紋から命名された加賀海軍）」の主力となった。浅津は七尾軍艦所に入所、軍艦蒸気方棟取に任命される。元治元年再び勉学を願い出て江戸の軍艦操練所へ、慶応元年には英書翻訳に携わるようになり、『英国歩兵練法』第二編、第四編の翻訳を完成し、翌慶応2年、同書出版後帰藩した。浅津は藩軍艦「李白丸」の機関修理監督を命じられるが、慶応3年同艦が七尾の暗礁に触れ破壊、修理のため長崎に送られることになった。浅津は4月李白丸で長崎に向かったが、加賀藩には帰らず9月には長崎より英国留学に旅立った。加賀藩はすでに関沢幸三郎、岡田秀之助の2人を英国に留学させており、浅津は3人目の留学生であった。英国留学中の詳細を示す資料はない。1年間の留学を終え帰国に向かった折には明治元年になっていた。維新後浅津は名を浅津涉（あさづわたり）と改め、さらに南郷茂光（なんごうもちてる）と改めた。

経歴をかわれ、明治元年12月に彼は新政府に徴され大坂府の判事試補・外国事務掛となる。明治3年7月版籍奉還後加賀藩は名称を金沢藩と改め、藩の権少属・外国教師取扱方を拝命。七尾に外国人英語教師第一号オズボーン（Percival Osborn）を迎える役目を果たした。外国人招致でも金沢

藩は先頭を切っていた。オズボーンの後任の外国人教師を大阪、東京、横浜に迎えに行っている。南郷と海軍とのつながりは七尾で始まったが、海軍主計大監を最後に退官、勅撰貴族院議員、明治商業銀行取締役などを務め、明治 42 年、72 歳で没、海軍軍人として、教育者として、政界人として波乱の一生だった。

3 『英国歩兵練法』『重訂英国歩兵練法』についての一考察

3-1 『英国歩兵練法』下曾根稽古場蔵版 慶応二年刊 出版元 山城屋佐兵衛 [江戸]

原書 *Field exercise and Evolutions of Infantry* は「歩兵野戦操練および運動」の意味で、陸軍に入隊した新兵への基礎訓練から、小隊 (Platoon/Squad)、中隊 (Company)、大隊 (Battalion) まで、それぞれの役割と行動を教練する教則本である。この原書は国立国会図書館、東京大学史料編纂所、防衛大図書館が所蔵している。原書は至って小さく 12.7 cm×9.7 cm でポケットに入るサイズである。537 ページの中には図版 63 枚が含まれ、内 12 枚は「きおつけ」「やすめ」「構え一筒」「捧げ一筒」などの号令で取るべき姿勢、銃の扱いや動作を示す人物像が描かれている。ほかには隊列の集散、行進の方向などの基本運動を示す図、小銃の部位の名称、ラッパによる指令、「隊を開け」「集まれ」「進め」「止まれ」などが 15 種の楽譜によって示されている。訳本ではこれらの図版が忠実に模写されている。

『英国歩兵練法』は五編八冊からなり第一編、第三編、第五編が赤松訳、第二編上下、第四編上下、図禄が浅津訳である。序文以下の本の構成を目次ごとに訳語と原語 (カッコ内に示す) を示す。第一編「新兵即隊列、操練の式 (Recruit or Squad Drill)、第二編「小隊操練式」(Of the Company)、第三編「筋入銃用い方」(Rifle Exercise)、第四編「一大隊の体制及び運動」(Formation and Evolutions of Battalion、第五編「軽歩兵の式」(Light Infantry) となる。

3-2 『重訂英国歩兵練法』慶応三年刊 薩摩蔵版 出版元 秋田屋太右衛門 [大坂]

京都薩摩藩邸で英式兵制の講義をしていた赤松に藩主島津久光から原書の 64 年改訂版の翻訳が命じられる。五編までは『歩兵練法』と同じであるが、第六編「龍隊即ち横隊編成及び運動の式」(Formation and Movement of Brigade or Line)、第七編「要用諸件」(Miscellaneous Subjects) が加わる。赤松は『歩兵練法』の誤訳などを訂正し、さらに向上したであろう英語力を使い推敲を高めた。上田市立図書館にある青本には赤松の筆とみられる朱筆の訂正箇所や朱筆の貼り紙が少なからず見られる。これらは赤本に反映されているか。前述の松島論文 (1992) が例示しているのを借用すると、① 「業ニ熟セル長官ト下長一緒ニ」(青本) ② 「種々ノ長官或ハ稽古長官、教師ト共ニ」(青本の朱筆部分) ③ 「種々ノ長官或ハ稽古長官、教師ト共ニ」(赤本) のように朱筆による修正箇所は『重訂』(赤本) に活かされている。

では青本の浅津訳は赤本の赤松訳に活かされているか。原書を参考に比較検討してみる。第二編 第一条より同じ部分を対照させる。「一 小隊ヲ作ルヘキ銃卒の事 ○ 銃卒是マテノ学科ヲ残ラス精シテ学ビタラハ新ニ小隊ノ運動ヲ教ヘテ大隊ニ組入ルノ用意ト成ス 是カ為ニハ十八伍ヨリ二十伍マテヲ以テ一 小隊ヲ作りテ番数ヲ計ヘ分ツヘシ」(赤本)

「一 中隊備用ノ兵士 ○ 前編ノ諸練法ヲ皆ク通学セル兵ニハ是ヨリ中隊運動ノ法ヲ教授スヘシ 是大隊ヘ直ニ属入スル為ノ 前用意ナリ 且是カ為ニハ十八伍ヨリ二十伍ヲ編成シテ中隊ト号ス」(青本) 原書の *company* を赤松は「小隊」と訳し、浅津は「中隊」と訳している。原書は以下

の通りである。

PART II OF THE COMPANY/GENERAL PRINCIPLE/ I

-Soldiers to be formed in a Company – The soldier having been thoroughly grounded in all the preceding parts of the drill, is now to be instructed in the movements of the company, as a more immediate preparation for his joining the battalion : for this purpose from 18 to 20 files will be formed and told off as a company.

つまり赤松は『重訂』の第二編を訳したとき、浅津の訳をそのまま使用していない。内容は同じであるがその表現法（文体）が違っている。

なお、原書を照合すると『歩兵練法』は原書の第六編、第七編を訳していないことがわかる。原書には 3-2 で示したように第六編 (Formation of Brigade or Line)、第七編 (Miscellaneous Subjects) がある。これはどう解釈したらよいのだろうか。日本帝国陸軍の編成を参考にすると、最も小さい単位が分隊 (Squad) 10 名前後、小隊 (Platoon) 4 分隊 40~60、中隊 (Company/Battery/Troop) 3 小隊+中隊長直下兵員 60~250、大隊 (Battalion/Squadron) 4 個中隊+砲兵の小隊・中隊 300~1000、連隊 (Regiment) 3 個大隊+通信、砲兵隊 500~5000 前後、旅団 (Brigade) 2 個連隊 2000~5000、師団 (Division) 2 個旅団+野戦病院、工兵連隊 数千~1 万、となる。原書では旅団 (Brigade) までを扱っている。さしあたり『歩兵練法』では 1000 名ほどの軍隊の基礎訓練を徹底させることを目的とし、『重訂』ではさらに旅団 (赤松の用語は「龍隊」) を含む全体の翻訳を試みたのではないか。薩摩塾で赤松が新たに訳したのは第二編、第四編、第六編、第七編ということになる。長崎滞在中に赤松は 2 冊の蘭書からの翻訳書を出している。原書はオランダ陸軍の銃隊の教則本である。軍事書の内容には通曉していたので、訳述にはそれほど苦労しなかったのではないか。慶応 3 年 5 月には出版の運びになっている。

『英国歩兵練法』翻訳と出版は横浜居留地駐屯軍に幕府軍が直接指導を受けたことと関連があると思える。それまでの教則本がオランダ語であり教練もそれに沿ったものであれば、英軍指導の教練には英語の教則本が必要とされたのだろう。英語学習も盛んになり始めた時期とも重なる。仏式伝習が始まるのに呼応して横浜には仏語伝習所ができたように、文久 3 年、在横浜の米人宣教師、ブラウン、タムソン、バラを教師に英語伝習所もできた。このころには英語学習の環境が整いつつあった。赤松がこのブラウン塾で学習したという資料はないが、国際都市横浜は長崎とともに英語熱を刺激する場所であった。

赤松のブックリストに英学関係の書 (辞書、文典、地理書等) が多いことから、彼自身の英語への関心の高さがうかがえる。西洋の文物を英語を以てさらに知りたいという意欲に燃えていた赤松はあっけなくテロに倒れた。その無念さを晴らすにももっと赤松の成したことを知ってもらいたい。

参考文献

Field Exercise and Evolutions of Infantry as Revised by Her Majesty's Command, 1861, by Great Britain War Office, 1862, London

『石川郷土史学会会誌』25 号、石川郷土史学会、1992

歌野博「幕末英航ひとり旅—加賀藩士南郷茂光慶応三年の旅」『北国文華』復刊 2 号、北国新聞社、1999.

大糸年夫『幕末兵制改革史』白揚社、1939.

大塚武松『幕末外交史の研究』宝文館出版、1967.

倉沢剛『幕末教育史の研究』二 吉川弘文館、1984.

竹本知行『幕末維新の西洋兵学と近代軍政』思文閣出版、2014.

中山茂『幕末の洋楽』ミネルヴァ書房、1984.

『史料でたどる明治維新期の横浜英仏駐屯軍』横浜開港資料館、1993.